

「父の旅立ち」

(2010)

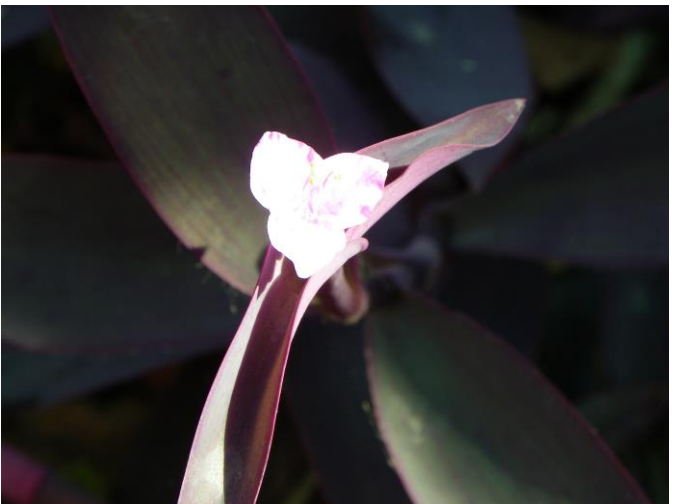
新涼や胸に影持つ父うつら

病床の父の薄目に秋入日

秋入日父は酸素を吸いながら

秋日差すベッドの父の薄目にも

雪しきり父の胸水溜まりつつ



如月の音無き雨に父逝けり

春暮れて父は静かに昇天す

春昼の父は白磁の骨となり

新しき父の墓碑銘花の中

初御空父の遺影の輝けり

父逝けり「花摘む野辺に」口遊み

くちずさ

黎明の紅葉明かりに亡父の影

ちち



小満の優しき風に納骨す

納骨を終えれば菜の花盛りなり

秋入日書齋に父の後ろ影

ふばこ

父逝きて文箱開ければ秋の風

亡き父の文箱整然秋の風

お浄土を歩む父なり落ち葉鳴る

御浄土の父の声聞く良夜かな

父逝きて母一人居の家暮るる

笑っている仏の父や 冬桜

「母の旅立ち」

(2019)

母逝きて小さき焚火を引き継ぎぬ

庭焚き火 妣ははに代わりて火を起こす

母逝きて名知らぬ薔薇の母の庭



母の忌に母の育てし菊活ける

母の忌に供えし母の冬さうび

母の家母の声する十三夜

縁側に母の面影十三夜

後の月母の気配やそこここに

はだら

母遺す焚火の跡に斑雪

冬温し 百年の皺 母逝けり

「主亡き庭」

主亡き庭に蠟梅匂い立つ

亡母の庭 蠟梅更に匂いけり

父母の亡き古庭蠟梅香りたつ



父母逝きて植生の小屋に夕焼雲

螢袋灯りふるさと暮れにけり

ちちははの顔して二輪帰り花

庭の隅 人目を避けし白椿

古庭に人待つ如し白椿

訪<sup>と</sup>う人の無き母の家 白椿  
寒椿 主無き家守りけり

残り火に母の魂<sup>くすぶ</sup>燻りぬ

海光り白南風に乗り父母還<sup>しら は え</sup>る

白南風に乗りて還りし父母といふ

木瓜<sup>ぼけ</sup>の花 殊更紅く亡母偲<sup>あか は は</sup>ぶ